伊勢の中世

第　２　６　９　号
伊勢中世史研究会
令和元年７月１日発行

事務局：〒515-2321　三重県松阪市嬉野中川町 1524－121　竹田憲治方
メール　takeda@ztv.ne.jp　ホームページ　http://mietyusei.bakufu.org/

切原の獅子舞、中須の御頭神事

本稿は平成 30 年１月 21 日（日）に行われた「切原の獅子舞」、および平成 31 年２月 11 日（月・祝）に行われた「中須の御頭神事」について、筆者が見学および聞き取りした神事の内容をまとめたものである。両神事では舞が廃止され、オカシラサンを飾るだけに簡素化が進んでおり、神事を取り巻く状況が共通することから合せて報告することとした。

＜切原の獅子舞＞

１　切原集落の概要と神事の現況

切原集落は現在の行政区分上では三重県南伊勢町に属し、かつての南勢町域に含まれる。南伊勢町の集落の多くは熊野灘沿岸の海岸部に点在するが、当該集落は沿岸部から離れた山間部に所在する。かつて三重県が実施した調査時点（平成５年）では 180 世帯で構成されていたが、近年急激な高齢化と人口減少が進んでいる。当該神事は過去に調査が行われ詳細な報告がなされているほか、インターネット上で平成 24 年１月 15 日に行われた神事の一部が閲覧できる。報告によれば、神事はかつて旧暦正月 15 日に行われ、平成４年以降は１月第２土曜に実施としているが、平成 29 年度は１月第３日曜に行われており変更がみられた。また、平成 27 年度から舞手の担い手が確保できず、舞は行われなくなっている。これに伴い神事は簡素化が図られ、オカシラサンを公民館に安置し、地区住民が参拝する形になっている。参拝を行った住民には、事前に用意された餅が配布される。なお、公民館内で謡の行事は実施されるとのことであったが、筆者は見学をしていない。

２　オカシラサンと御供え

オカシラサンは、公民館の縁側部分が開放され、オカシラサンを収めている木箱の上に、蓋を裏返してその上に安置されていた。天狗面も同様に安置されていた。かつての調査報告では太鼓の上に安置されているが、安置方法も異なっている。オカシラサンは、箱書によれば「大工下太蔵」により「文久弐壬戌歳（1862）」に制作されたとされるものである。獅子頭は金箔が貼られ、頭頂部に一本角、眉は弓形を呈し、目の白目部分は銀地で、黒目部分には三日月状の表現がされている。上顎には３条の刻み、下顎には２条の刻みがみられ、頬部に浮彫で巻毛表現がある。目から顎にかけて複数の割れがあり、修復が施されている。

御供物もオカシラサンと一緒に木箱の上に置かれ、木箱の隅には蝋燭が立てられていた。御供え物の内容は別表の通りで、過去の報告と比較するといくつかの御供えがされなくなっている一方、新たに追加された御供えもあることが分かる。ここで注目したいのは獅子舞後に参集者に向けて投げられた縁起物とされる天鞠や、藁で編まれた小判餅などが確認できなかった点である。これらの供え物は、月の数である12個を用意する点に共通点があり、切原の獅子舞に特徴的なもので、今回確認できなかったことは悔やまれる。

平成5年（1993）	平成30年（2018）	
天鞠	×	
扇子	○	
ユリ敷餅	×	
セチ	○	
小判餅	×	
するめいか	×	
昆布	○	高野豆腐、干しシイタケ、人参と合わせて一碗
かぶら大根	○	
串柿	×	
×	洗米	
×	吸い物	
×	大豆	
×	白菜	

表1　切原の獅子舞の御供え物の変遷

＜中須の御頭神事＞

3　中須集落の概要と神事の現況

中須集落は、現在の行政区分では伊勢市に含まれるが、かつては度会郡城田村に属していた。同じく旧城田村域の上地および川端でも御頭神事が行われてきた。集落は伊勢市中心部から宮川を隔てた左岸に位置し、約180世帯ほどで構成されている。当該神事は堀田吉雄氏や伊勢市史により昭和40年代および平成10年代の様子が報告されているほか、地元の山川和夫氏が神事当事者として詳細な記述を行っている。堀田吉雄氏が早い段階で事例を報告した神事の一つであるが、現在は旧暦1月10日の前の日曜日に行なわれ、少なくとも平成22年度以降舞は実施されず、住民の参拝を受けるのみとなっている。

4　オカシラサンと御供え

オカシラサンは普段かつて産土社である八王子社を祀った神社跡地に建てられた祠に収められ、神事当日は祠前に安置され、地区住民の参拝を受ける。

オカシラサンを収納する木箱には「元禄四年（1691）辛未十二月吉日」の墨書があるとされるが製作年であるかどうか断定できない。オカシラサンは地元では雌と伝承されており、頭頂部に角はない。眉は渦巻状を呈し、白目部分は金箔で表現されている。鼻は団子鼻状で、鼻穴は円形である。上顎に3条の刻み、下顎には刻み表現はない。前面の歯が6本あるのに対し、側面の歯は2本と少ない。舌は下顎と一体で彫られており、舌の奥はくり抜かれ舞のための把手がある。全体的には赤漆地であるが、顔の半分以上が焦げている。これは、かつての舞の中で火を噛む所作があったことや、祠前の鳥居にかけられた大注連縄に火をつけオカシラサンに噛ませていたためである。天狗面はオカシラサンの前面に安

置されていた。

鳥居には大きな注連縄が張られていた。かつての注連縄は比較にならないほど大きいものであったという。山川氏の記録ではその一端が確認することができる。鳥居前の両脇には御供えものが置かれていた。詳細は別表のとおりである。この中で注目したいのは山椒味噌を塗られた里芋で、過去の報告でも指摘がされており「ゴク」と呼称するとされ、蝮除けや夏病みしないとされ氏子に配られたという。山川氏の記録によればかつては12個の里芋を三宝にのせて御供えするとあるが、今回は6個しか確認できず変容がみられた。その他の御供え物の内容については、かつての報告には記述がないため比較はできない。

供え物
御神酒
大根
パイナップル
リンゴ
みかん
するめ
山椒味噌の里芋

表2　中須の御頭神事の御供え物

5　まとめ

切原の獅子舞は、舞や春田打ちと呼ばれる特徴的な農作業の劇もなくなり、オカシラサンを安置するのみと簡素化が急激に進んでいる。一方で、舞が出来なくなっても神事を廃止せず、オカシラサンへの参拝が継続されていることは、切原住民のオカシラサンへの崇敬の深さを物語っている。また、謡行事は実施されており、神事の継承への苦心が見られる。かつての神事の内容を知る住民が多くいる今の段階で、改めて詳しい聞き取りや調査の必要性を感じる。

中須の御頭神事は、地区各所での舞がなくなり、地区住民の参拝のみとなっている。しかし、神楽師と呼ばれる舞経験者は少数ながら健在で、調査時にも「神楽師会」により日本酒の奉納がされていた。かつて村松の神楽師から支援を受けた歴史を考えれば、他地域との交流を通じて神事再興の可能性もあり、早急な行政の支援や調査の必要性を感じる。

二つの神事の違いは、芸能的に見た場合、切原の獅子舞はこの地域特有の舞振りであるのに対し、中須の御頭神事では七起しの舞が行われており、現在も同様の舞を行う御頭神事が伊勢市域を中心にみられ、相互の交流により継承の余地がある点である。ただし、同じ七起しの舞といっても各地区での相違もある。現在も伝承されている各地区の御頭神事が記録化され、中須での聞き取りによる確認作業を行い、どのような神事が行われてきたか継承していく必要性を感じる。

最後に御頭神事の御供え物に関して言及しておきたい。各地の神事を見学すると、一年間12ヶ月を表す12個の御供え物がさまざまな内容ではあるがなされている。今回報告の切原では天鞠と小判餅、中須では山椒味噌の里芋である。こうした月の数と同数の供え物を用意する類似例として、度会町棚橋ではかやの実、度会町一之瀬では小判状の餅、伊勢市有滝ではみかんなどが確認できる。閏月のある年には供え物を1個増やす事例もあり、月の数を強く意識していることが分かる。こうした御供え物の共通性はこれまであまり指摘はされていないが、御頭神事の特徴を表す一つといえ、今後も注視して調査を続けていきたい。

（味噌井　拓志）

＜参考文献＞

・切原の獅子舞

櫻井治男・岡田照子　1994「切原の獅子舞・春田打ち」『三重県の民俗芸能』

服部勝行　2019『三重県の獅子舞　平成に伝わる 200 の舞』

※なお、動画は下記のサイトにて閲覧できる『三重県の獅子舞』

https//www.youtube.com/channel/UCaSo_Szs9Xw9CBQjfuPAXw/videos?feature=hovercard

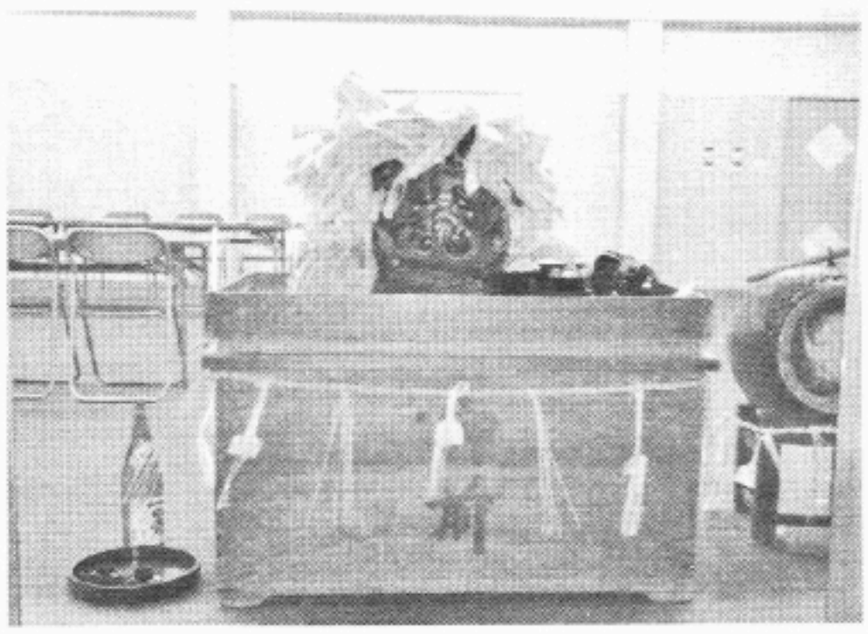
・中須の御頭神事

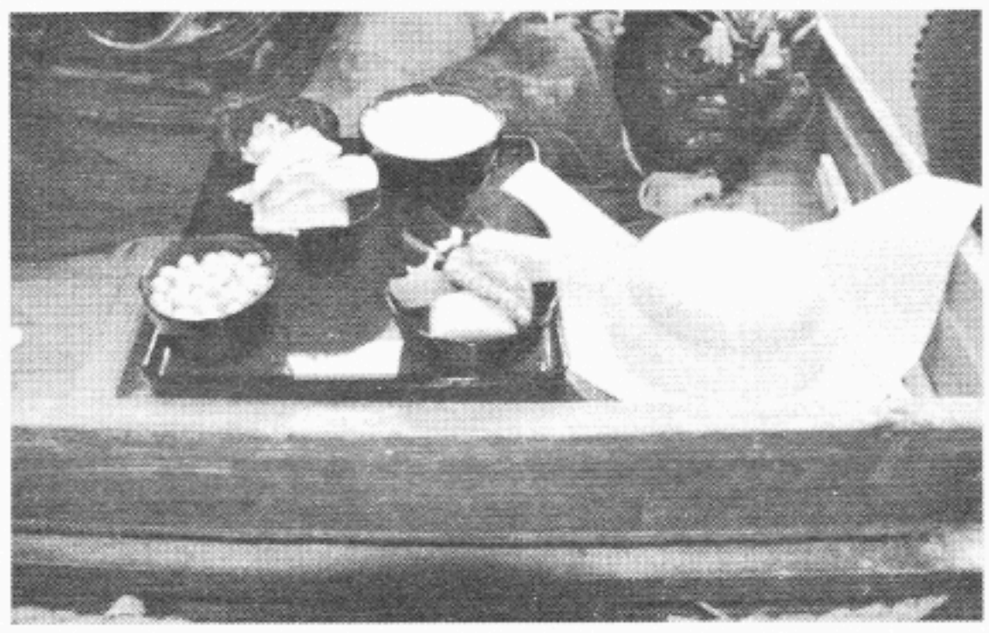
堀田吉雄　1969「中須の御頭神事」『伊勢民俗八ノニ巻　御頭神事特集号』伊勢民俗学会

山川和夫　1983『城田地区の御頭神事』

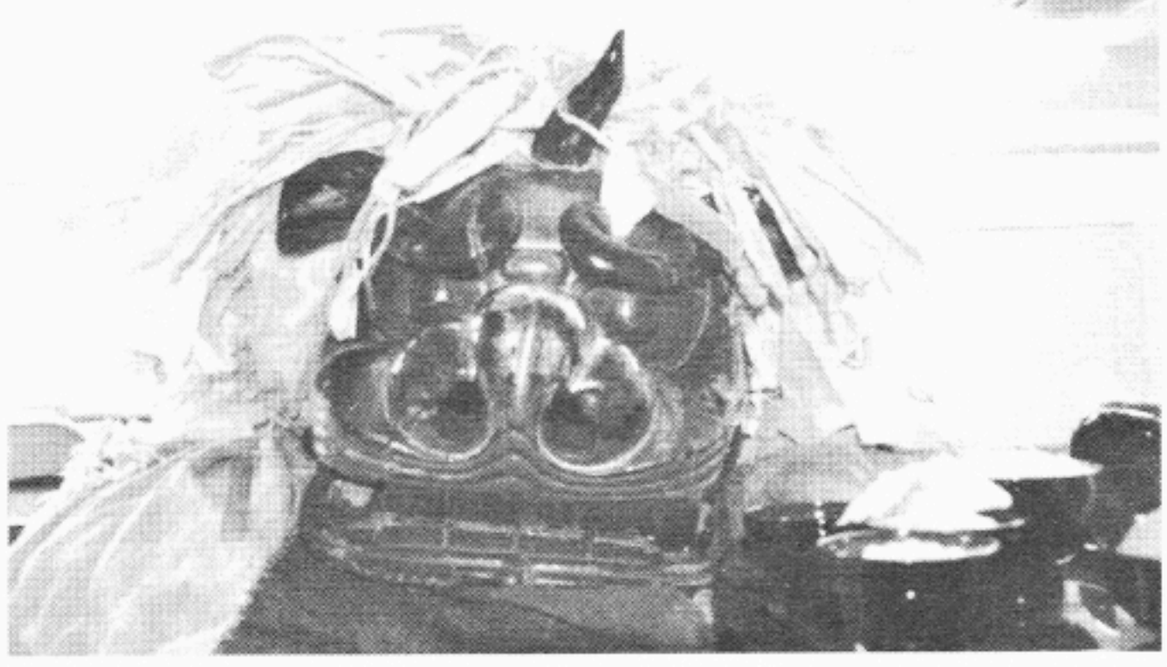
伊勢市　2009「２　御頭神事」　『伊勢市史　民俗編』

＜切原の獅子舞＞

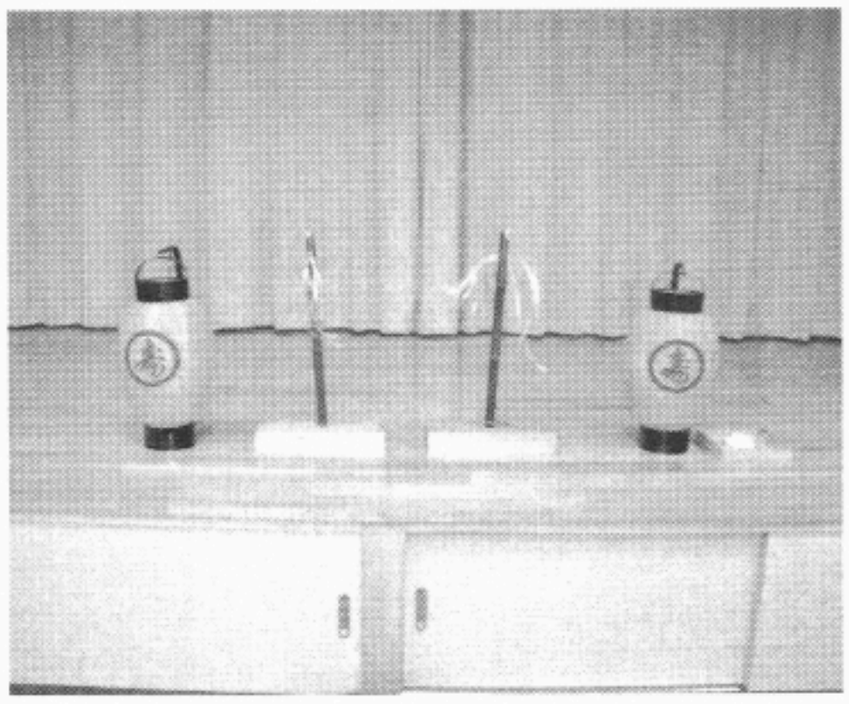


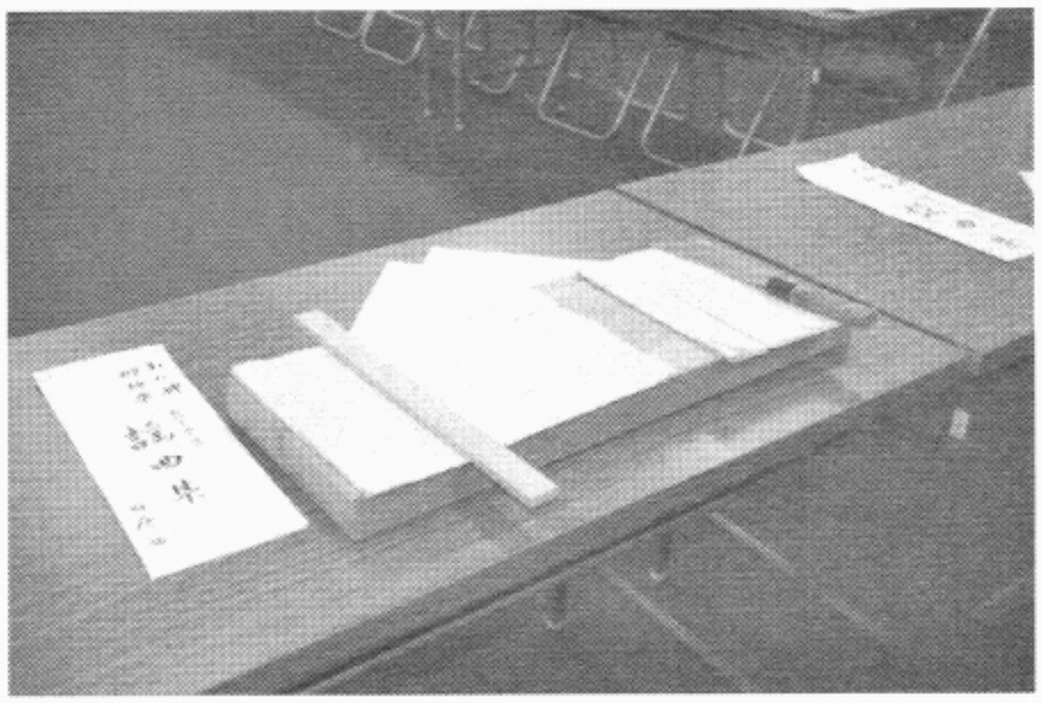


安置状況と御供え物



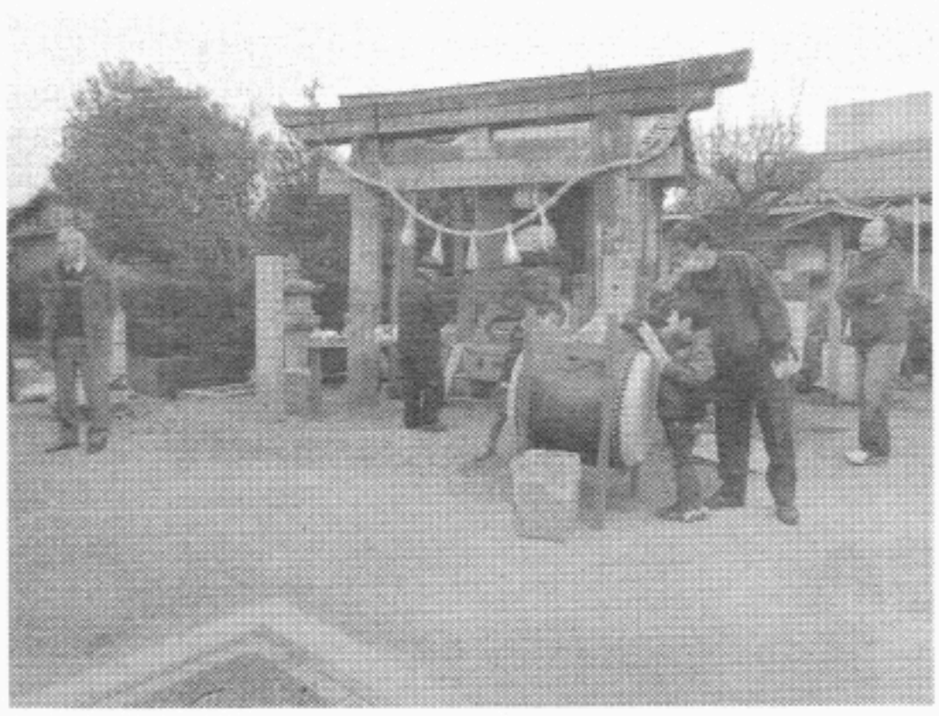
獅子頭と天狗面



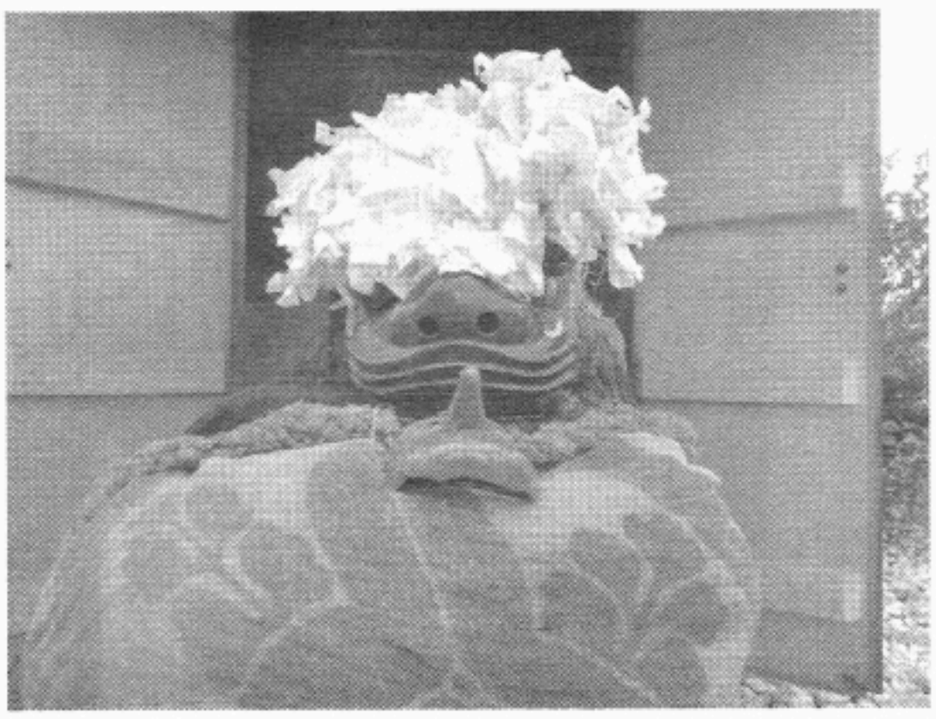


謡行事関係資料

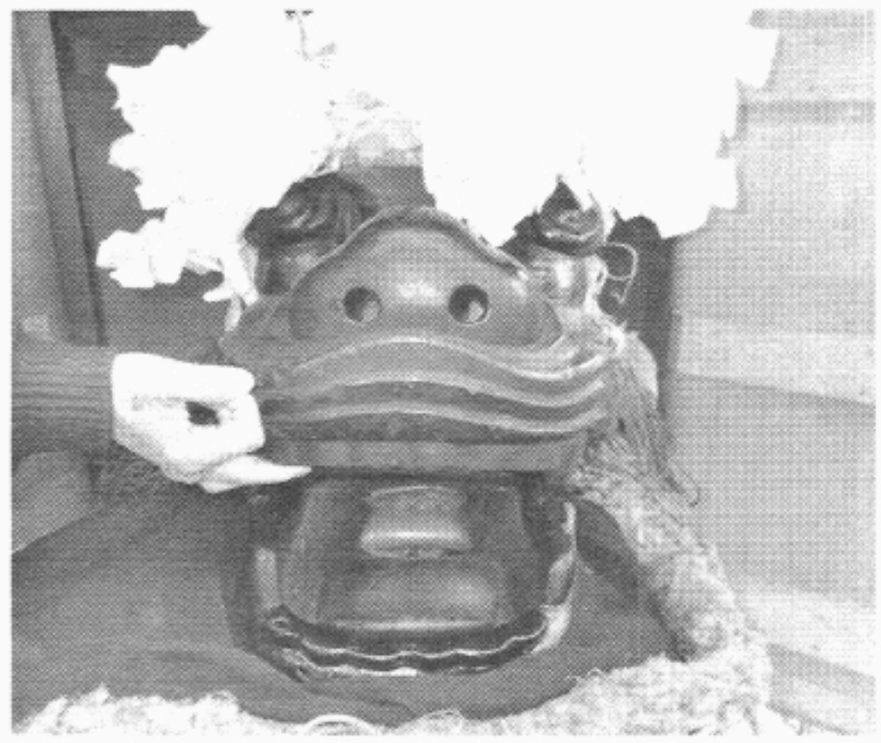
＜中須の御頭神事＞



現在の神事の様子と山川和夫氏報告のかつての大注連縄



オカシラサンの安置状況と御供え物（中央が山椒味噌の塗られた里芋）



オカシラサンと天狗面